



繪本朝鮮署

丸鉄梓

二冊



A546
27



朝鮮
異聞
二編

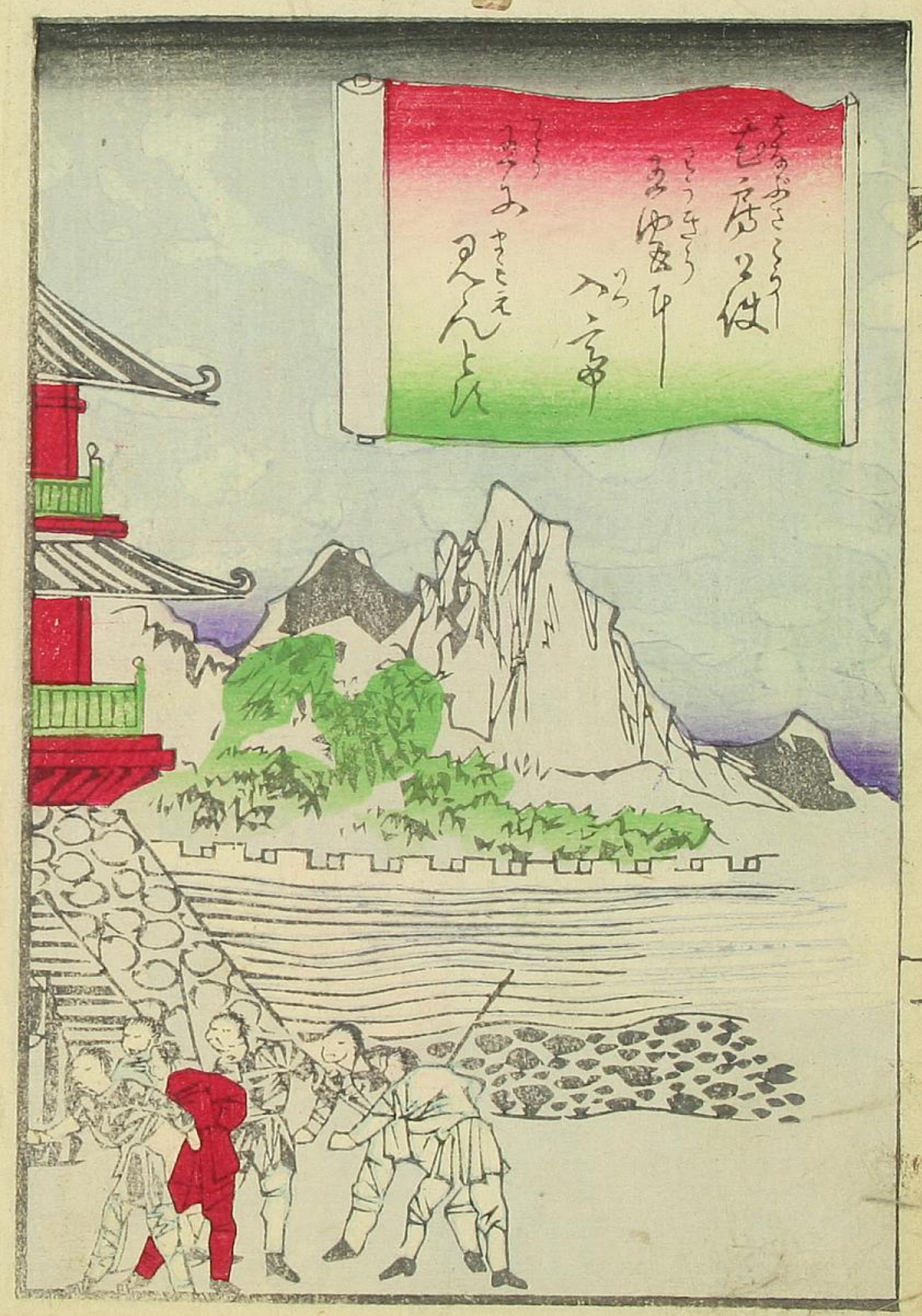
繪本朝鮮異聞二篇

訥亭 岡本 湖月 編

花房公使の一行ハ賊の圍ミを切抜けて二十四日の朝
 咸谷里なる百姓家ニ飢を凌ぎ再び雨を冒して立ち出
 つ、午後三時仁川府ニ着、府使鄭志鎔出でむの
 へ、自ら政堂を開きて公使の休憩所となし、何やら
 衣をいせ、公使の濡きる服ニ替へ茶を供せ
 るなど懇切なる取扱ひ、一同ハ安心しぬき、服
 を脱ぎて乾し、今や午の勞れを休め、夕刻横ふなる

朝鮮二

<48-8#03>



ちや寐入ねいりしるものも有りしるが午後五時ごじころとしか
 びりたころ門前かどまへ俄とく入騒さわかしくドツと揚あげしる鯨波しんぱ
 よおとろを覺さめて人々の脱ぬきしる服やを付つける間まもな
 く門前かどまへの休所やすどころに居ゐる 巡查遠矢庄八郎おんざとやじやうはちらうが満身血まんじんちに染そ
 らして驅かけ来きり賊兵再ぞくへいとび寄よせ来きり御油断ごゆだんのるなと
 知らせの迹あとより同五十嵐惠吉どうごらんゑきちも反そつしる刀やを杖つゑみし
 てヨロメキよろめきく来きるを見みれば苦戦くせんの様ように知しらきしり
 様子ようすのいふにと問とふなるとなると 巡查横山貞夫おんざよこやまのさだおカチと来き
 しり政堂せいどうの門かどを閉とめて始はめてホツと息いきを吐つき賊徒ぞくとが

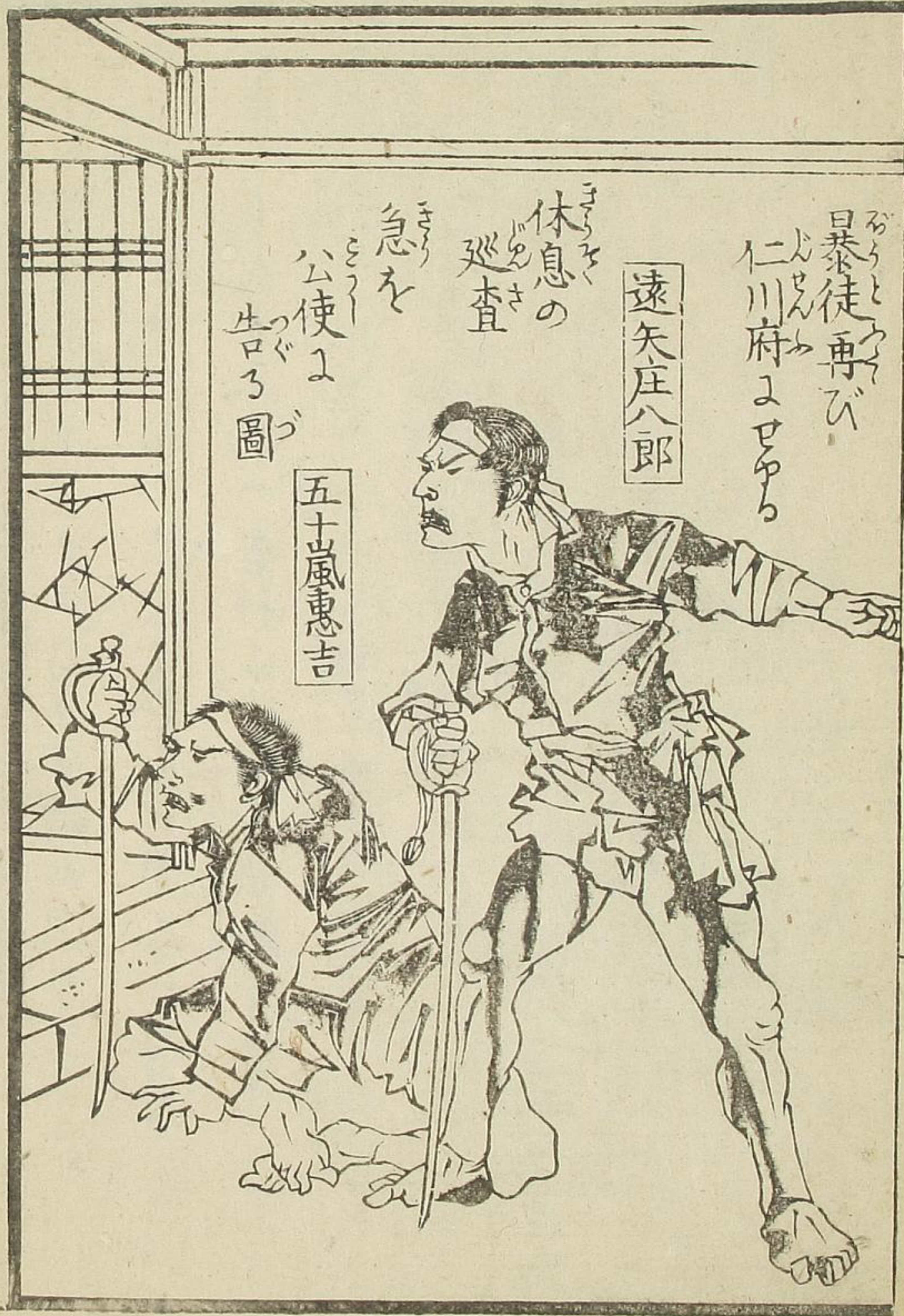
我われが不意ふいを襲おそひ巡查廣戸昌克おんざひろとむしやく宮錦みやにしん太郎たろう數名死かずなにちに速すみし
 一方いつちうを切きりやぶりに出いでむんば圍かこみり容易やすに脱だし
 ぶらんと三氏さんしの告つげは一同いっとうに切齒きししするの府兵ふへい
 も賊ぞくと合あはしりし今いまは是こゝを是こゝでなりと隊伍たいぶを立た
 て外そとに出いきば政堂せいどうの前まへの暴徒ばうとにちりして矢石銃砲やせきじゆうぱう
 放はなひをなく打ちのける事ことともせば花房公使はなぼうこうしを中ちゆう
 圍かこんで一同必死いっとうひつしをなすをり表門口おもてかどぐちを面おもても振ふらば切きつて
 出いづまば思おもふよの似にぬ臆病おくびやうのみよを道みちを開ひらいて左右さうぶ
 より銃砲じゆうぱうを打うつのこなきを辛からくして重圍じゆうゐを出いで疾はやく



浅山頭藏

岡兵一

花房公俊



暴徒再び
仁川府より

速矢庄八郎

休息の
巡査

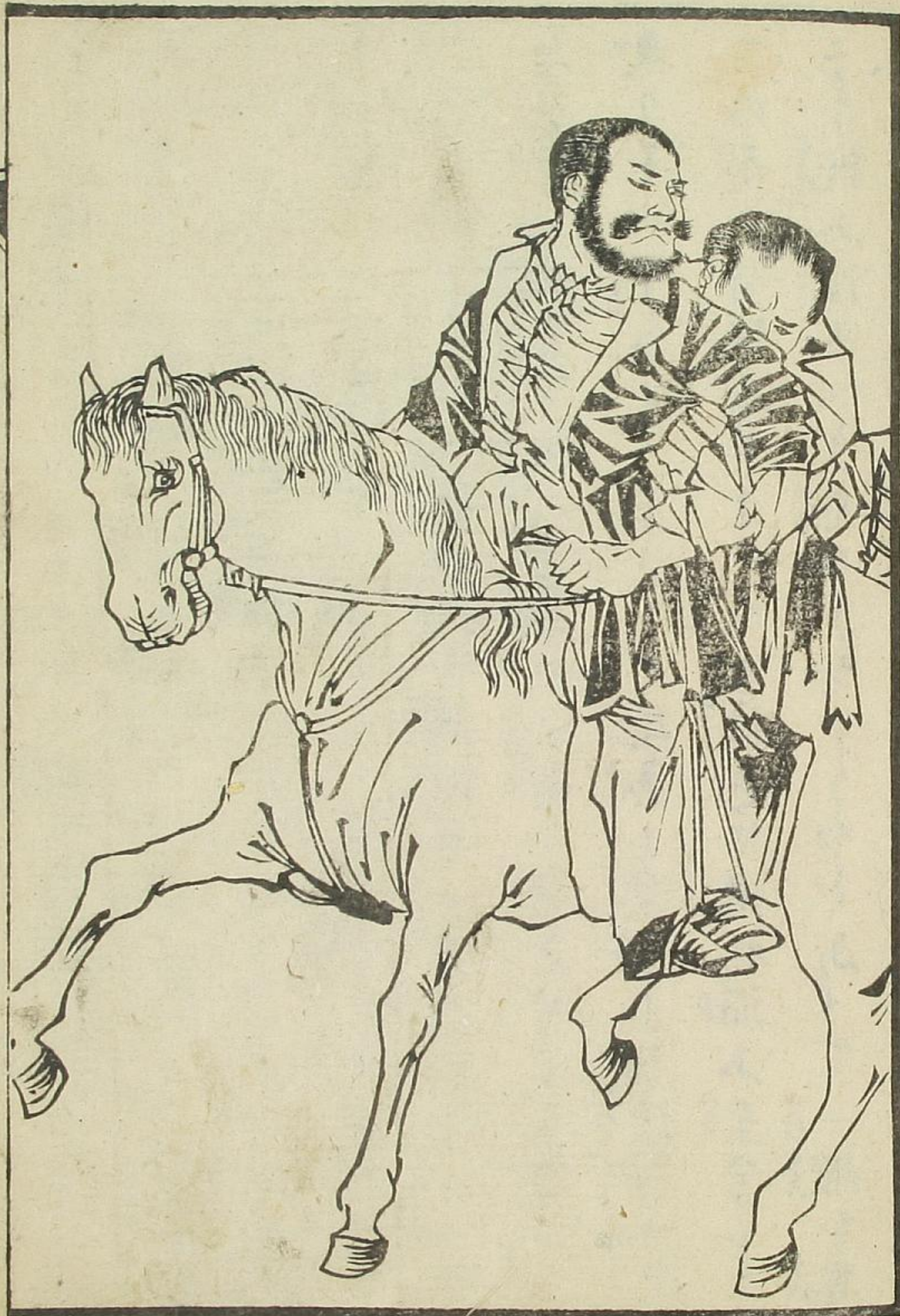
急を

公使よ
告る圖

五十嵐惠吉

走りて濟物浦の道へ出せば賊ハ残らば一手よりて
 跡を慕ひ花房公使云々と呼ぶるを知らず石を投げ眉尖
 刀を揮ひ餘りまはとを追うけし岡警部小林巡査ハ
 殿りして近づく敵を三四人狙ひを外さばうら倒せば
 チリくハッと逃げ散りてハまゝ集りて追ひ来る近づく
 けハ短銃より先をよ進む賊を打ち逃げまば此方も行
 く方をやめ進つ返し十四五町も来るも此方ハ
 より馬を飛ばして濟物浦ハ居たり久水三郎と高雄
 謙三の兩人が来り濟物浦までのはひとよハ伏兵等ハ

何事なるとの報一同行少く心を休め兩氏を道案
 内ハ進むところへ松岡利治杉村清武田甚太郎の三名
 も来會くれば互び力付て久水が騎来り馬
 を楓玄捨ハ與へ先づ馳せて濟物浦ハ至りて舟の用意
 成をさくを高雄の馬を花房公使ハ進めイザ乗りたま
 へと云へば公使ハ傍へ在り浅山ハ向ひ御邊ハ傷
 を負ひしれバ定めて行歩難義ならんこの馬ハ乗らま
 よとのふハ浅山ハ辭退し我傷を受しりて左のミ
 苦痛ハとえがとさあもろハ貴官とて此馬ハ乗る玉



傷者やうしやを
援たすけて

公使こうし

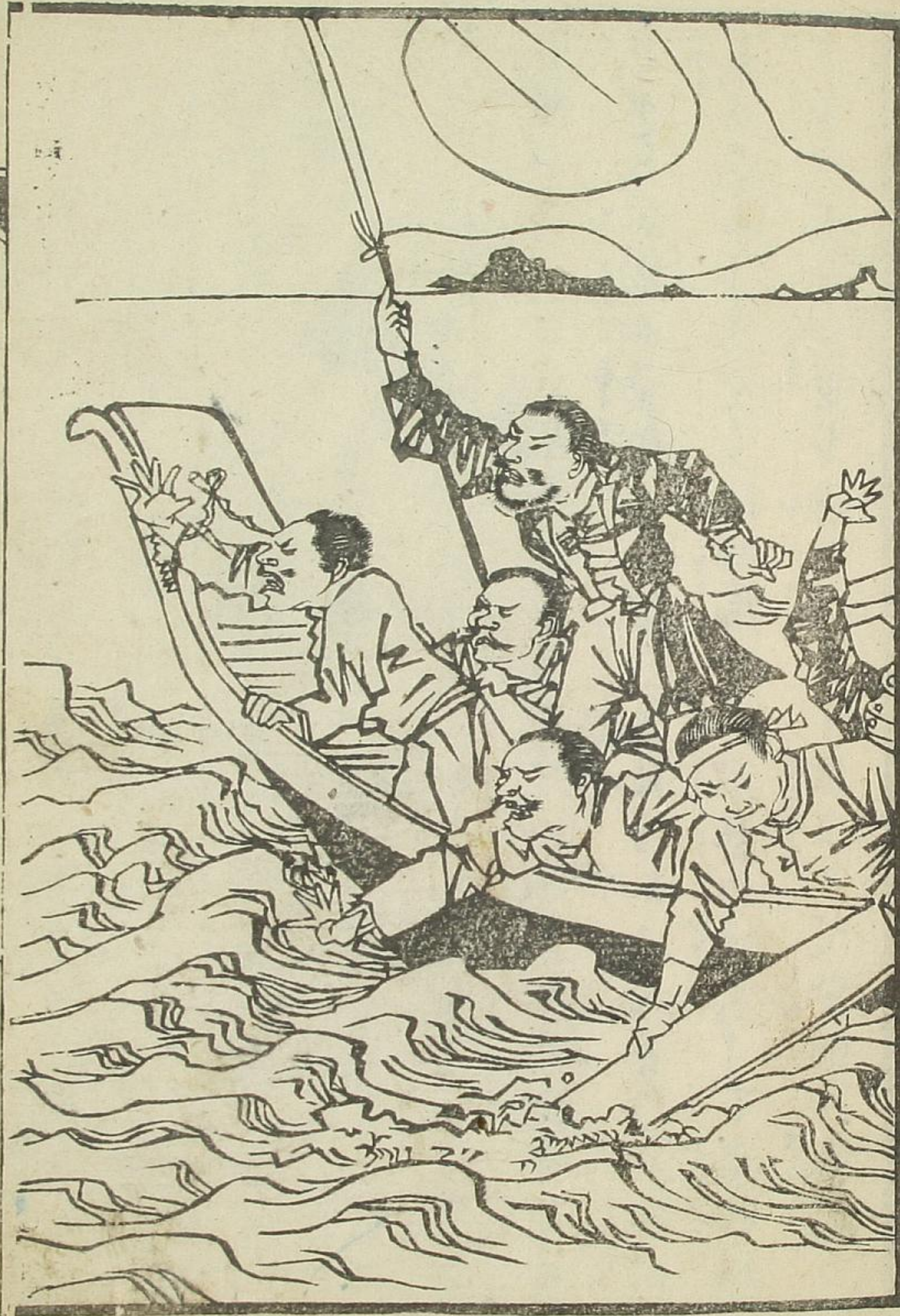
濟物浦さいぶつうらよ

走はる

の
圖ず

ふぞ至當なりしゆとてしづかひに譲りあひて果しをせん
 べ傍らより進めて公使と淺山と合鞍に乗せ立ち出ん
 とするときは後の山より狙ひ定めてズドンと一發小銃
 放りしものありしが幸ひみして公使も中らば各々
 相戒しめて左右不氣を配り濟物浦に着きこのまゝいな
 なを駆け廻りて土人を募り小舟を出させてこき取
 乗り七八早へぐぐぐ月尾島に渡りしが近藤水野
 その下の負傷者等十八人も後せて濟物浦に至りし
 ころ既に渡りし舟なきを中らやくりし一船を奪

ひ得しれど漕々人なく又櫓擢もなされば銘々手を擢
 みして潮流箭の如き川を横切り漸中くみして岸に着
 き公使の一行と會合ししころの月尾島は長く止る
 べりよららば外國蒸氣船が南陽灣に碇泊すると聞け
 ば是不便船して兎も角もせんまりなららるゝ小舟に
 て海濤を右のぎゆのんころと心元をすす進退しれ極ま
 りて如何いせんと額をうつ免集議不時を移せしが所
 詮止り居らるゝみもあらぬ命を海若と委ねて舟を
 出せとて一同小舟に乗移り沖に向つて漕ぎ出でし



海中の漂ひを救ひを
 他船より
 求む
 圖三



廿五日の朝なり〜が逆風の為め舟進まば海上に漂ふこと一昼夜全ト廿六日の朝霧の晴間小橋の見ゆる正しく外國船と相違なりとして曩に公使館を出るとき護り来り國旗を出し竿頭を掲げて目標となし救ひを求めし午後三時より彼船よりしきを見附け直ち小船を漕ぎ寄せて一同本船へ助け乗せ見せば英國測量船と艦長其他も知る人なれば款待最もたふかりならん此處に溜島の沖ありて濟物浦よりハ十五海里を遠く隔て海上にて今朝の霧深り

らすバ他入航行せむ目的なり〜ハ滞留し〜甲斐ありて諸君を救ふことを得しと艦長何某が語せりよ公使の朝鮮國王殿下に書を呈さるゝ難を避けて此處に到るの事由と近日再び渡航をなさし事とを云ひ贈りよ〜同文司觀察使の暴徒の為め死し〜る者の埋葬の事と生死詳し〜ぬ者の救護を請ふ事と紙書き認め外堀本中尉(此時安否未だ知れず)に贈る一書とを此處まで伴へる韓人の船主と托して觀察營朝鮮の役所へ出すべしとて歸りやらせし夜十時に英船八件

の沖合を投錨し長崎より廻航し廿九日一同恙なく同港へ着し

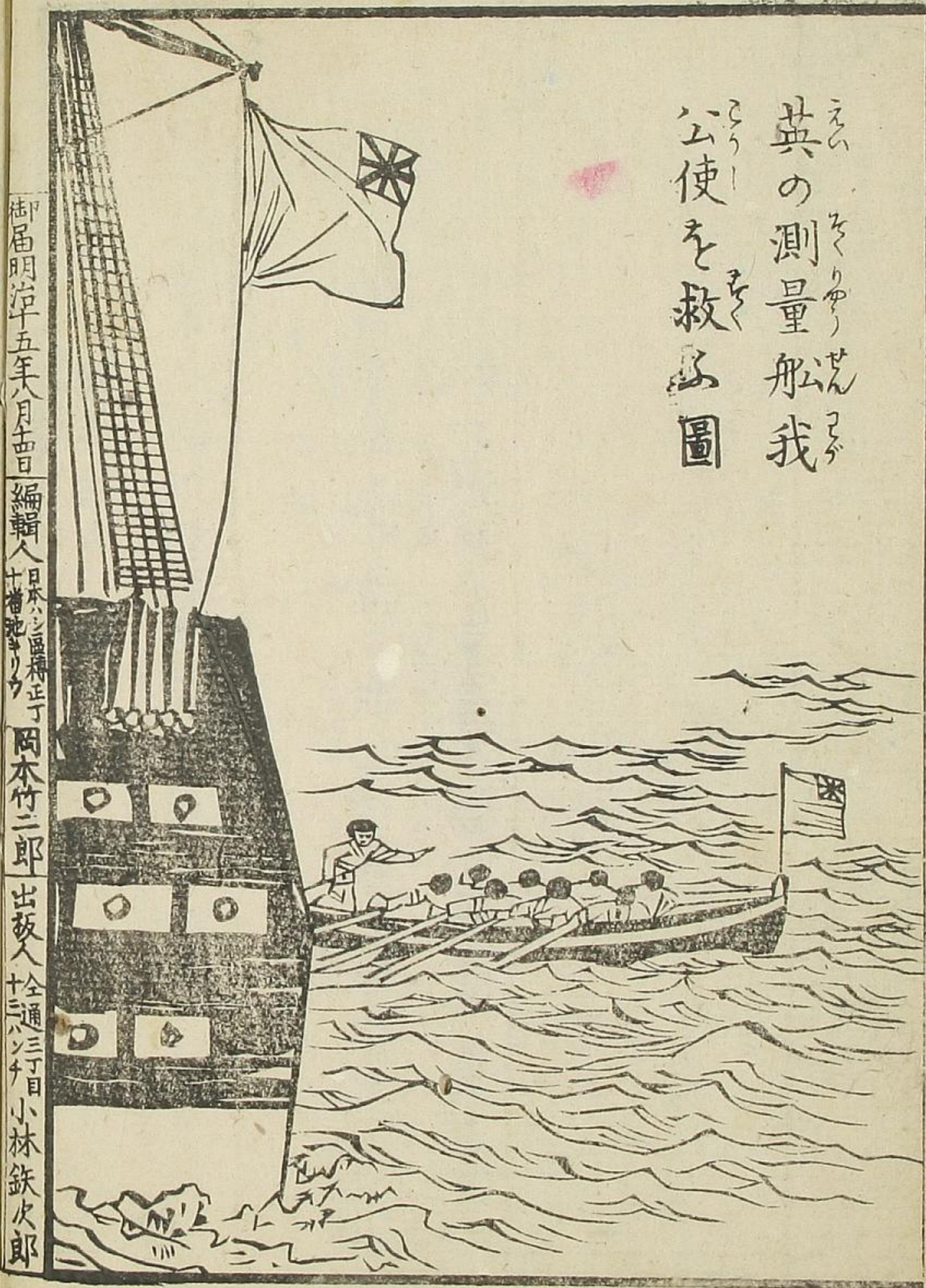
編者曰花房公使が長崎より帰着し此變を外務卿に報せらるるや否大臣諸参議内閣に會合し種々評議の未井上外務卿に馬関に出張し此處に事務所を設け花房公使をして再び彼國に遣はし護衛の爲にとて日進天城等の諸軍艦を艦し八月十日馬関を發し彼地に向つて進航せりとの事變に付て花房公使に如何なる談判を開くや又彼國政府が奈何なる返答

をなすや此稿を起るときの未だその報を得るに由なきれども尔後の報知を待て續々編出し看官の意は充んとし又曰ふ朝鮮暴徒が不意に我公使館を襲ひたる原由及び彼國內亂の状況は次篇を讀で知るべし

繪本朝鮮異聞二篇了

010190514485

英の測量船我
公使を救ふ圖



御届明治五年八月廿日 編輯人 日本之區精平子 岡本竹二郎 出版人 全通三丁目 小林鉄次郎

蛇娘毒蛇洲三編

水車種清
揚洲周延

海菜のそ

浪枕江の島新語三編

保田彦作編輯
揚洲周延

三編のそ
方小史と所そそそ
るふ所所ひ下は所
不病人のそそそ
一袋一袋

情明治太平記

村井静馬著 伏見の鮮本救に至る十五編
鮮齋永濯画 十六編より鹿兒島に至る

○初編ハ伏見戦争を始めとく上野東京山焼討より其外
御一新以来の事情明細な記を居多く人情開化目する
と平々付繪文みて婦女子も解りやすく綴り書あり

書肆問屋

東京日本橋通三丁目十三番地
延壽堂 丸 小林鉄次郎版元

